發するのであつた。從つて淨土教は濁世に於て、自己が救はれねばならぬ對象として存在する。だから淨土教に於てはあの世への願生に依つてのみ、そこに蘇つてのみ、初めて凡夫が救はるゝのであつた。それは大悲の世界であるが故に、道は無碍の大道である。

かく一應人力を否定すること、これ彼等が、所謂宗教を阿片として排擊する根據であつた。いづくんぞ知らん、その否定はやがて大なる愛への蘇りであるのだ。

小野は今宗教について、小さな見解を述べて見たい。それは獄中で得た體驗である。宗教とは、現實の不完全なる我を否定し、佛者の世界、即ち彼岸の世界——完全なる世界——への不斷の進展そのものを云ふのではなからうか。從つて宗教とは、彼岸への憧れである。慾望である。人間が完成されたものでない以上、常に永遠の生命と、限りなき光明への到達を望んでやまぬものである、聖人は（以下親鸞の二字を省く）『正信偈』の初句の二行を以て、信仰の世界の何物なるかを明白にされた。それは「歸命無量壽如來、南無不可思議光」に於て明かだ。

また佛とは覺者とも云はるゝ、此の點に於て、佛教はキリスト教の如き創造者をば持たぬ。佛とは、此の宇宙に内在する眞理即ち實相を體驗したものに過ぎない。從つて佛の境地にあつても、因地は人間を飽迄も離れることはない。法華經に說く十界悟具、一念三千と云ふが如きも、人を超越

した佛なるの世界があるものでないことを明白にしてゐる。

この故に吾々は、此の世に一切法ありと見る。其の見地からは、山川草木悉くのものに、精神的意義を認める。山川草木悉皆成佛とは、かく考へて初めて可能である。

人間が神を造つたか、神が人間を造つたか、それは知らない。けれども吾々は、全世界に滿ち滿ちてゐて、一切のものを動す、或る大きな力のあることを認めぬ譯には行かぬだらう。そして人間を中心として彼岸の世界へ到達する慾求を持たぬものはないだらう。それは生活の悶え、憂え、迷ひ、此等は死すべく運命づけられた人間に、永久につきぬ存在であるから、吾々は、かゝるまゝの自分の姿を見た時に、眞に其のまゝ救はれる世界がほしいであらう。

そのまゝの救ひと云ふことは、同時に其のまゝで止らぬと云ふことだ。從つて其のまゝのお救ひは、吾々を淨土の世界へ蘇らせて下さる第一歩となるのであつた。

4

然らば如來とは如何なるものか？　これが唯物論者の聞かんと欲する所である。同時に如來は此世に現在するか、これは如何にして立證さるゝか、それが最大の問題となつて來る。この解決なく

ば宗教は、一つの迷信になつてしまふのである。

これについては先づ、從來の誤つた考へを放棄しなければならぬ。それは第一に如來に對する從來の形式的な考へ方の殘存と、第二には宗教の實體と、其の表現との識別である。そこで先にも繰返した樣に、先づ宗教と云へば佛なるものが連想され、佛とは死者を意味するが如く考へられ、寺院には樣々の佛像が安置され、又裏地の方には墓が並んでゐる。

これが先づ宗教として考へらるゝことであつた。死者を葬るに手厚くし、祖先の靈をまつることは正しいことである。また佛像を安置することも正しいことである。けれども、これは宗教の本質ではなかつた。宗教は、自己の現生命の問題で、それから過去、及び未來へと考へらるゝのである、彼の佛像の如きも、阿彌陀如來にせよ、觀音にせよ、それは盡十方無碍光如來の意義が、具像さるゝものとして、初めて意義あるのである。

宗教の實體は、筆や口ではつくせるものではない。けれども何とか表現しなければならぬ。そこで經文も必要となつて來る。其の點に於て親鸞聖人が、あらゆる經文を如來の本願に合流せしめたことは、極めて達識であつた。即ち宗教の本體は

「おほよそ、大信心海を按ずれば、貴賤緇素をえらばず、男女老少をいはず、造罪の多少を問はず修行の久近を論せず、行にあらず、善にあらず、頓にあらず、漸にあらず、定にあらず、散にあらず、正觀にあらず、邪觀にあらず、有念にあらず、無念にあらず、尋常にあらず、臨終にあらず、多念にあらず、一念にあらず、たゞ此れ不可思議、不可稱、不可說の信樂なり、たとへば阿伽陀藥の、よく一打の毒を滅するがごとく、如來誓願の藥は、よく智愚の毒を滅するなり」

聖人は如來をどうお考へなされたか。その前に淨土の世界なるものを、一つの國土に限定したりすることの誤りを先づ知らなければならぬ、それは天親菩薩の偈に、「觀彼世界相、勝過三界道、究意如虛空、廣大無邊際」とある通り、一切の上にあまねき、無邊際の世界である。

次に聖人のお言葉を引用しよう。

「しかれば佛について二種の法身まします、ひとつには法性法身と申す、ふたつには方便方身と申す、法性法身と申すはいろもなし、かたちもましまさず、しかれば心も及ばず、ことばもたえたり、」

即ち法性法身——眞實の姿は色もなく、形もないのだ。從つて宗教の實體を、形像的に立證しやうとすることは、根本的に誤りであつた。

「この一如よりかたちをあらはして、方便法身と申す、その御姿に、法藏比丘となのりたまひ

て、不可思議の四十八願を、をこしあらはしたまふなり、此の誓願のなかに、光明無量の本願、壽命無量の弘誓を本としてあらはれ給へる御かたちを、世親菩薩は、盡十方無礙光如來となずけたてまつり給へり」

これは如來の動的な姿を表したものだ。今此の淨土教の理想を明かにするために、原始佛教より淨土教、即ち眞の大乘佛教への發展を考察して見やう。

釋尊の時代に於ける原始佛教、それは涅槃道であつた。故に個人の解脱を中心とした寂靜涅槃の境地を理想したのである。然るに轉じて大乘佛教になると、菩薩道となる。それは個人でなしに全人の道であつて、單に自利の道でなしに、自利利他の道であつた。

大乘佛教に於ては、普遍の道を求める。自らは菩薩の位に止つてゐる。即ち一切衆生に對し、無邊に濟度の誓願を立てゝ、菩薩の業を成ずるのであつた。けれども、これは極めて小數の人々に限られたることであつて、多數の人々は、到底佛果を得ることは出來ないことゝなる。彼の龍樹大士でさへどうであらう。

一切菩薩ののたまはく
われら因地にありしとき

無量劫をへめぐりて
萬善諸行を修せしかど。
恩愛はなはだたちかたく
生死はなはだつき難し
念佛三昧行じてぞ
罪障を滅し度脱せし。

これこそ僞りなき告白であつた。從つてこゝに、淨土教の生まるゝ歷史的必然性があるのであつた。前にも云つた樣に、淨土教は現實の時世から出發した、そして事實の觀察に於ては今日の社會科學の學徒と良く似てゐる。けれども此の世に、吾々の行で其を淨化することが出來るならば、それは大乘教であつて、淨土教ではない。

先づ此の世を、五濁惡世と觀察する。吾々は、救はれねばならぬ仲間の一人として存在するのである。そして救ひの對象は、凡夫であつた。即ち吾々に、其のまゝ救はるゝ世界を知らしめてくれたのであつた。

けれども絕對的の救濟は、この世でなしとげらるゝことではなかつた、此の世に望みを斷つこと

がなかつたなら、淨土教は成立しなかつた。此の世の否定は、不完全なる我の自覺と、否定であつた。それはより大なる世界への蘇りであつた。思ふ通り衆生を利益することが出來る道であつた。

然らば此の世は、完全に否定されたのであらうか。否々、願生は、此の現實の我を直視した時に初めて其處に成立したのだ。それは如來の心光に攝取せられた時、攝取して捨て給はざれば、長く生死をへだてられし身にして頂いたのである。

無量壽經の「諸有衆生、聞其名號、信心歡喜。乃至一念、至心廻向、願生彼國、卽得往生、住不退轉」、此に依りて明かである如く、現實の我が、不退轉の位にある以上、この世がすでに、如來の光明の中に攝められてゐるのであつた。從つて現實の否定は、我等の罪業の否定であつたのだ。また我々の煩惱のまゝの姿の否定であつたのだ。然るに大信心の世界からは、其の煩惱のまゝの吾々が、如來の慈悲の中に生き得るのであつた。

5

明かに知る、この宇宙の實相、絕對的眞理は、それ自體が人格化する。如來を人格化したものに、絕對的眞理を、因果に依せて說いたものが經文で、法性法身は、超因果的なものであつた。從

つて方便法身となつて、初めて因果關係が生じた。大經はそれを具體的に表現したものであつた。

さて、いつも問題になる大乘非佛說について一言したい。佛なるものが、釋尊一人に限定されたものなら、その論も成立するのであるが、自ら佛と名のるものゝ說いたのが佛敎でなしに、普遍道を說いたものが、佛敎であるならば、今更大乘非佛說等で、論爭を繰返すことは愚の至りである。

然らば此の安養の淨土、無上涅槃の世に對する聖人のお考へを、再びこゝに引用する。

「かの國をば、安養と云へり、曇鸞和尙はほめたてまつりて、安養と申すとのたまへり、また論には蓮華藏世界とも云へり、無爲とも云へり、涅槃界といふは、無明のまどひを、ひるかえして、無上覺をさとるなり——涅槃と申すは、その名無量なり。くはしく申すにあたはず、おろおろその名をあらはしべし。涅槃をば滅度と云ふ、無爲と云ふ、安樂と云ふ、常樂と云ふ、實相と云ふ、法身と云ふ、法性といふ、眞如といふ、一如といふ、佛性といふ、佛性卽ち如來なり。」

信心と言ひ、涅槃を得るといふも、この大なる生命に、我々の小さな生命、それも其の表れの一つであるものが、合體したに過ぎないのだ。

「この如來、微塵世界にみちゝたまへり、卽ち一切群生海のこゝろなり、草木國土悉く皆成佛すると說けり、」

卽ち如來は、如何なる場所にも、つねに居給ふのだ。然らば眞宗に於ける、念佛の意義はどうであらうか、

「この一切有情の心に、方便法身の誓願を信樂するが故に、此の信心すなはち佛法なり。この佛性卽ち法性なり、法性卽ち法身なり」

明かに知る、實相の世界を人格化し、それに因果關係を與へた。其の一如の世界よりの、方便法身の姿に、阿彌陀如來がなられたのである。此の法藏の根本は、如來の誓願の本である大慈悲であつた。法藏菩薩に於て、大慈悲の具體化が吾々凡夫に悟られたのだ。

それは或ゆる衆生を救はんといふ、大誓願であつた。それは一切のものが、兄弟姉妹であるといふ大きな世界であつた。誠に知りぬる、我々有情の心に、此の如來の誓願を信樂する時、それがほんとうの金剛の信心であると。

「この報身より、(阿彌陀如來) 應化等の、無量無數の身をあらはして、微塵世界に無礙の智慧光を放たしめ給ふ故に、盡十方無礙光佛とまふすなり、ひかりの御かたちにて、いろもましまさず、かたちもましまさず、すなはち法性法身に同じくて、無明のやみをはらひ、惡業にさえられず、この故に無礙光と申すなり、無礙は有情の惡業煩惱にさへられずとなり、しかれば阿彌陀如來は

光明なり、光明は智慧のかたちなりと知るべし。」

これに依りて明かである如く、そも〳〵近代の科學を萬能なりとし、それに依り立證されぬが故に、宗教を迷信と罵ることは、明かに誤りだ。

凡そ宇宙には、その實相世界があるが、吾々の認識は、限られた世界だけである、從つて現在の社會科學では、到底これを究明にすることが出來ぬのだ。それを究明したかに思ふのは、淺薄な凡夫の計ひだ。

唯物論者は「最初の所與は物質であつた。精神は物質の最高位に發達したものである。從つて物質的生產過程が、人類の意志の決定權を有してゐる。」と、いふ。

けれども人類は、かゝる精神の發達段階に於て、單なる物質的規範の下に、機械的生活をなすものでなしに、吾々の歷史を造つて行くものであり、彼岸の世界は、この人類が無限の進化からして、初めて成立するものである。

思ふに人類は、精神生活を營むことによりて、初めて動物的範疇から脫却して、草木國土悉皆成佛の世界に對する精神的認識を持ち得たのではなからうか。唯物論者が、觀念と稱する吾々の精神がなかつたなら、今日見るが如き人類の進化はなかつたであらう。何れの世に於ても、人類がその

不完全なるを自覺し、完全なるものを欲求した時、そこに初めて宗教が成立し、人類の調和の世界があるのであつた。

6

凡夫の信心は虛假不實なものだ。從つて如來廻向の眞實の淨信を得てのみ、一切が淨化されるのであつた。それについて今少し實感を述べて見やう。

小野は先づ、それを肉身の上から考へて見よう。此の世に於て何が親しいとて、親子の間ほど親しいものはない。この切つても切れぬ親子の間でさえ、限られた世界の內にある。自分のほんとうに愛する子でさえ、どうにもならぬのだ。いくら愛する子でも、救ふことが出來ぬではないか、聖人は自らそれを體驗された。

聖人は其の一子善鸞と信仰を異にしたと云はれてゐる。そこに聖人は、自分達人間の姿を、如實に體驗せられたのだ。『御消息集』の左の一章を讀む時、小野は悲痛な感に打たれる。

「慈信坊が、よう〳〵にまふし候なるによりて、ひと〳〵も、御心どものよう〳〵に、ならせたまひさうろうよし、うけたまわりさふらう。かえす〴〵も不便のことにさふらう。ともかくも佛

天の御はからひにまかせまいらせたまふべし。その所の緣つきておはしましさふらはゞ、いづれのところにても、うつらせたまひさふらふて、おはしますやうに、御はからひさふらふべし。慈信坊が申し候ことをたのみおぼしめして、これよりは、余の人を强緣として、念佛ひろめよと申すこと、ゆめ〳〵申したること候はず、きはまれるひがごとに候。この世のならひにて念佛をさまたげんことは、かねて佛のときをかせたまひてさふらへば、をどろきおぼしめすべからず。やう〳〵に慈信坊が申すことを、これより申し候と御こゝろえ候、ゆめ〳〵あるべからずと。」

聖人は我子の不信に對しても「かえす〴〵なげきをぼえ候へども、ちから及ばす候」と仰せられてゐる。これを見ても、親子の關係が自分の思ふ通りにならぬものであることは明かだ。これはどうして救はるゝであらうか。これに對して聖人は「如何にいとをし不便と思ふとも、存知の如く助け難ければ、この慈悲始終なし」と失望された。

聖人は、「念佛して、いそぎ佛となりて、大慈大悲心をもておもふがごとく、衆生を利益するを云ふべきなり」と仰せられ、卽ち聖道の慈悲が、如何に達成さるゝことの困難であるか、また淨土への願生は、如何に吾々を、大きな世界に蘇らせて下さるかを明かにされた。

この世に於ては、親子の間でさえ相尅關係のものも少くなかつた。また子としては、どうであら

うか。小野は少くとも親不孝であつたと、自白せざるを得ない。

また親子の仲が、どんなに良くあつても、それは限られたものであつて、永久的なものではなかつた。また如何に一家安樂に、そして平和であつても、この世に於ける萬行諸善は、眞實の世界ではなかつた。それは假想を見てゐるのであつて、いつか其の輪は欠けて行くのであつた。だから眞の親子と云へど、この世のまゝでは、人類愛と云はれれぬ愛であつた。

吾々の生活は、如何にして眞に統一され、純化されたものとなり得るであらうか、それこそ小野の求むる所であつた。聖人は仰せらるゝ。

「親鸞は、父母の孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたること、いまださふらはず、そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり、いづれも〳〵此の順次生に佛になりて助け候ふべきなり。わがちからにて、はげむ善にても候はゞこそ、念佛を廻向して、父母をも助け候はめ。たゞ自力をすてゝ、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生の間、如何なる業苦に沈めりとも、神通方便をもて、まづ有緣を度すべきなり。」

このやうに第一義の世界に於ける信仰は、親孝行のため、善行のためではなかつた。それは吾が救濟されねばならぬ對象であり、飽まで純眞でなければならぬのであつた。念佛は孝行を約束する

ものでもなければ、禍福を左右するものでもなく、病氣の全快を條件としたものでもなかつた。

聖人は一切の有情について、それは一切のものが、父母兄弟であり、何れも順次の生に佛になりて、助け合ふべきであると、仰せられた。これが眞の念佛者の世界であつた。從つて、吾々の孝心も、兄弟愛も、この大慈悲の世界から出發したものでなかつたら、それは眞の愛と云ふことが出來ぬのであつた。此の世界に蘇つて、そして再び父を見、兄弟を見た時に、初めて父母兄弟のために念佛して助けることになるのである。

7

小野は更に、これを一般衆生と自已と云ふ問題について考察して見る時に、うらみ、ねたみの心の支配する自分を見るであらう。

外儀のすがたはひとごとに
賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪僞多きゆへ
奸詐もゝはし身にみてり。

小野は獄中に於て、過去に觸れ合つた多くの知己を追想した時、あまりにも自分の愛の不純に驚いた。けれども、それ等の人々に對する心の負債の重荷は、他力の信樂を獲得すると同時に、解消されたものであることを知つた。

無慚無愧の此の身にて
まことの心はなけれども
彌陀の廻向の御名なれば
功德は十方に滿ちたまふ。

小野は性の問題について、考察を進むべき時に到達した。此のことは如何に人々の惱みの問題であるか、性慾それ自體が、人間の本能的な衝動であるために、性の問題に對する正しい見解を持つことは、何人にも現實の問題として重要のことであつた。

小乘佛教に於ては、この色慾に對しては、極端な憎惡をもつて望み、ために佛教は婦人を惡魔と見るかの感さえ起さしめた。然るに大乘佛教に於ては中和され、聖人に於ては、

行者宿報設女犯　我成玉女身被犯
一生之間能莊嚴　臨終引導生極樂

とある通り、自から帶妻されたのであつた。そして聖人は、單に性慾を減することにより、涅槃を得んとする迷妄を打破せられた。

小野は戀愛に對しても、獨自の立場を求めることを拒まない。ダンテの『神曲』に於けるベアトリチエ、ゲーテの『ファウスト』に於けるグレチヘンの如きは、戀を永遠の女性迄發展せしめ、それをして神の愛を象徴せしめた。

けれども現實の吾々はどうであらうか、眞に正しい、永遠の愛を持ち得るであらうか。これに對しては否と云はざるを得ぬ。何故ならば、吾々の愛は、眞に愛すると稱するものを、裏切り傷つける樣な限られたる愛ではないか、そこに男女の相尅が起されるのであつた。

從つて夫婦の愛、男女の戀愛、戀愛すべてそうしたものは、大悲の生命に蘇つてから、再び煩惱の林に入つたのでないと、眞實化されるものではなかつた。卽ち眞の愛は、此の大信心海より流れ出でゝのみ、初めて可能であつた。

さて、長々しい筆を進めて來たが、もう結論に急がねばならぬ。そこで自己の認識と對社會上、如何なる奉仕が必要であるかゞ考察されねばならぬ。

人のため、世のため——これは宗教を信ずるものゝ、何人も願ふ所であらう。然るに我の分析は

如何、吾々は宗教に入りつゝも、

浄土眞宗に歸すれども
眞實の信はありがたし
虚假不實のわが身にて
清浄の心もさらになし。
小慈小悲もなき身にて
有情利益は思ふまじ
如來の願船いまさずば
如何でか苦海をわたるべき。

こうした自己を思ふ時、小野は先づ自己を顧みなければならなかつた。自分の眞相を極めた時に人を救ふ等とはおこがましいことであつた。たゞ吾々は、阿彌陀如來の廻向の御名によつてのみ、その功德を與へられるのであつた。これについて聖人は、

「親鸞は弟子一人ももたずさふらう、そのゆえは、わがはからひにて、人に念佛申させばこそ、弟子にても候はめ、ひとへに彌陀のおんもようしにあずかりて、念佛申す人を、我が弟子と申す

ことは、極めてひがごとなり」

更に聖人が、八十八歳の時の、御筆として記されてゐる中に、左の様なものがある。

よしあしの文字を知らぬひとはみな
まことのこゝろなりけるを
善惡の字しりかほは
おほそうごとのかたちなり
是非知らず邪正もわからぬ此の身なり
小慈小悲もなけれども
名利に人師を好むなり。

誠に吾々凡夫の淺間しき心そのまゝが示されてゐる。聖人は更に

「この世の人は、無實の心のみにして、浄土を願ふ人は、いつわりへつらひのこゝろのみなりと聞えたり。世を捨つるも、名のこゝろ利のこゝろをさきとする故なり、しかれば善人にもあらず、賢人にもあらず、精進の心もなし、懈怠のこゝろのみにして、うちはむなしく僞りかざり、へつらふこゝろのみ常にして、まことのこゝろなき身と知るべし、」

このお言葉が、吾々現實の姿であつた。然らば吾々は此の淺間しい自已の淨化なくしては、人のため、世のためと云ふも、畢竟それは、身の程を知らぬ、おこがましきことゝ云はねばならぬ。從つて自力の世界に止つてゐて、自らの力をたのみとする時は、到底眞實の信を得ることは困難である。聖人は仰せられる、

「自力の心を捨つると云ふは、やう〳〵さま〴〵の大小の聖人、善惡の凡夫の、みづからわが身をよしと思ふこゝろを捨てゝ、身をたのまず、あしきこゝろをさかしく顧みず、また人をあしよしと思ふこゝろをすてゝ、ひとすぢに、具縛の凡夫屠沽の下類、無碍光佛の不可思議の誓願、廣大智慧の名號を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり」

とある通り自已の救濟と、社會への奉仕は、他力の信樂を得て、初めて眞實のものになるのであつた。だから一切は如來の光明に照されてのみ、其のまゝの救ひに預り、同時に一切衆生への愛の出發點となるのであつた。

8

ながゝと、自分の體驗を述べた小野は、今信仰を把握せるものゝ進む道について、本篇を結ば

うと思ふ。

それは第一に彌陀の救濟に依り、自已の更生より起る感謝の念である。宗教に於てはこの感謝の生活から、一切のものは湧出するのであつた。然るに此の世を物質的生產過程に還元し、一切のものに必然性を與へ、精神の世界を見ぬ唯物論者にとりては、感謝の心持は歸納されない。

吾々は先づ感謝の生活に入ることが、其の最初であり、最後である。信仰の生活は必然的に、信念の確立さるゝことは、說く迄もないことだ。此の世に信なくして處することは、船に羅針盤のないのと同一である。

更に眞宗教の第一義から行くと、其の臨終の善惡は問題でなく、至心信樂の歸命の一心他力より定まる時、自已の往生は治定するのであつた。從つて信仰の生活に入る以上、生死卽涅槃の境地を味ふことが出來る。また吾々が、一念信心の後も、其の人々の緣に從つて、如何なる死にかたをするかもわからぬ、けれども吾々は、如何なる死にかたをしても、必ず淨土の世界に往生することを得るのであつた。

宗教を信ずるものと、社會問題の關係についてはどうであらうか？　世は宗教をしてあきらめの法と見る人があるが、これは大なる誤りだ。それは宗教の解脫の一面を見て、精進の方面を見ぬの

であつた。

また他力とは、何でもかんでも人に任せることだと、こう思ふのも大なる誤りだ。幾回か〳〵繰返した様に、他力とは如來の本願力のことであり、小我の我が、大我の世界に蘇ることであり、ほんとうに自分が、生かさるゝことである。即ち吾々は、我ならぬ大きな力に依り益々活動的にならねばならぬのである。

大信者の歩む道は、莊嚴なる淨土の世界で、それは此の世からの準備なしには到達されない。救はれたものゝ生活は、感謝と報恩である、換言すれば、

一、如來に對する信仰と感謝、及び祖師其他に對する感恩の念。

二、同時に十方有緣への奉仕となる。

「信心すでに得ん人は、つねに佛恩報ずべし、」との和讃の心が、即ちそれである。小野は社會問題に對する起點を、こゝから出發せしめて行かう。

一切の衆生は、世々生々の父母兄弟である。この見地から同朋主義も生れるのだ、從つて佛法を信ずるものは、此の世の社會狀態の改善のために、其の一身を捧げねばならぬ。佛教徒は從來の因襲をかなぐり捨てゝ、この行詰つた社會問題の解決に、積極的な態度を以て、第一歩を踏み出さん

ことを念願するのである。

現在民衆の前に映る宗教は、先づ死者のための宗教であつた。宗教否定への克服の第一歩は、此の内部の清算から初めねばならぬ。吾々自身が、眞の宗教への歩みを續けることが、唯一の反宗教への闘争である。

今日位、宗教の實體が忘れられてゐる時はない。宗教それ自身も、常に現代に即すべく進化されて行かねばならぬものである。宗教は一宗一派のものでない、それは一切法であり、同時に民衆のものでなければならぬ。

小野は信仰を把握した大衆の一人として生きたい。それが第一の念願である。師と知友の指導のもとに、如來の御導きのまゝに、無碍の一道にひたすらに進んで行かう。

青色には青光あり、黄色にに黄光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、微妙香潔——そうだ、小野は其の與へられた道を歩まう、それが淨土の莊嚴を成就する唯一の道だ。

聲明は盡きた！　これは共産黨を脱する同志への告別の辭であり、同時にまた日本の全大衆に對する宣言である。

農民の歌

1

昭和五年の七月一日、突然看守の呼出しがあつた、それはF師からだつた。小野が行くと、いつもの溫顏で師は接せられる。

『今日呼んだのは外でもなが、君は教務の仕事でもして、牛馬の様に一つ自分を泣かせて見る考へはありませんか。もう所長さんの諒解は得て居るのだが、それとも今まで通り獨房に居て、ほんとうの信心にひたるなら、それも貴いことであると思ふがね。』

これは小野を、教務の雜役に採用してくれるとのことであつたのだ。だがあまりに突然だつたので、夢の様にしか思へなかつた。

自分の犯罪の性質上、彼は刑の終るまで獨房で暮すことを當然と思ひ、他の工場に出る希望も持つて居なかつたのであるが、これから廣い空氣を吸ふことが出來ると思ふと、その喜びで胸は一ぱ

いになつた。

『自分のやうなものを、それ程までに御信頼下さるなら、御期待に添はぬかも知れませんが、ぜひ使つて頂きたいと思ひます。』

『それでは今日すぐでもいゝのですが、一つ心得て居て貰はねばならぬのは、あなたが獨房で信仰を喜ばれて、宗教と云ふものは貴いものである、僧侶などはどんなに氣高いものであるかと思つて居られるのに、その現實の生活を見られて、それに失望されてはいけません。淨土眞宗の信仰は、吾々が清い人間になるのでなしに、この現實の淺間しい生活のまゝに、お慈悲を喜ぶ信仰だから、それを誤解しないやうにしてもらはなくては。』

教務室を出た小野は、夢ではないかと疑つた。こうして彼は一獨居から二獨居の方に移り、晝間は書庫の中に働いて居たのである。

小野は刑務所では、誰よりも如來に緣が結ばれて居た。監房から作業に出ると、室内の一寸した掃除をして、阿彌陀さまの掃除をやり、お花の水をとりかえる、これが朝の日課であつた。そうするうちに教誨師の人々が、朝の讀經をされるのだ。

それから一萬余冊の書籍の整理、貸出しの準備、引上げ、こうしたことが、小野の一日の日課で

ある。舍房に本を入れに行く時に、最初の時には一寸した荷であつたが、長い間足を使はなかつたので相當重さを感じて倒れそうだつた。

毎日F師と顏を合せる、そしてたま〳〵F師が話しかけられることは、何よりうれしいことであつた。客が來ると、お茶の給仕をすることもあつた。小野は、もう赤い着物でなく、青いのと換えられてゐた。これがまた赤衣よりは心持が良かつた。

ある日二人の紳士と、三十位の品のある細面の婦人が見えた。小野はお茶の給仕をしたが、女人禁制の刑務所で、しかも美人を眼にしたのは沙漠でオワシスの感があつた。

『今日來た方は、私の關係してゐる佛教方面の友人だか、婦人もいろ〳〵社會事業に働きかけたのは、大變にいゝ傾向だと思ふね。』

こうF師は話された。婦人が家庭より街頭への進出は、今後ます〳〵盛になるのであらう。それにしても理解ある性の解放を、小野は叫ばざるを得ないのだ。

2

小野と同じに仕事をしてゐた相手は、呉服屋の主人だと云ふ小市民型の人であつたが、どんなこ

とがあつても怒らぬ人だつたので、出獄まで此の人との交情は破れるやうなことがなくて終つた。けれども小野は、たま〳〵彼に對して不滿を洩すことがあつたが、彼は決して嫌な顏を見せないので、小野はこの男にも敎えられた。

暑い夏には、汗が背にじみ出して、鹽が着物を白く彩る程だつた。毎日働いて、そして生水を飲む、いろ〳〵な運動法を强行するので、どんなに働いてもつかれなかつた。その頃から小野は出獄するまで、就寢後一時間の點燈を許されて、讀書に利用して居た。

刑務所にもその年の秋が訪れた。秋が來ると小野は山のない東京が淋しかつた。こうして幾日かを過ぎる內に、刑務所の高屏を外にした民家の庭木には、黃色の柿が垂れる樣に實つた。

小野はこゝで犯罪の種々なる相を知つた。其の人達かどんなに惡いことをして、國法にふれたと云つても、現在こうして作業に日を送つて、一人として遊んで居るものがないのを見ると、此の囚徒も働く世界からは貴く思はれた。秋の夜に、八時二十分まで夜業して居る其等の人達は、何れも吾が罪の償ひをして居るのであつた。

働かずに、親の殘した財產で、毎日〳〵徒食する人は、たとひ閑居不善をなさなくとも、社會に對する害毒は、我々囚人より大きいかも知れない。これを思ふと勞働の名譽のために、其の意義を

高調したかつた。

小野は四人の囚人と同じに食事をした。其の一人は小野と同じ雜役の小市民で、靜かに自分の立場を守つて、社會がどうならうとかまはぬと云ふ型の人だ。一人は淫蕩な性格を持つた男であつたが、人間的には心持は良い方であつた。此の男とは良く女性のことについて言ひ爭つた。しかし彼にとつては、女を傷つけることは問題でなかつたので、小野はムキになつて論爭したのだ。今一人は狡猾だつた。自分ばかり良い者になつて、人を陷入れやようとする、この男が一番嫌だつた。

こうした小さい社會の中にあつて、小野は自分を信仰によつて統一して行つた。かゝる狡猾な人間は僞りや、呪ひの世界にあるのだから、それを思ふと氣の毒で、それ以上憎めなかつた。そして此の小社會の內にも、自分の救ひを體驗して行つた。

また小野に對立して、日蓮宗の熱心な信者があつて、炊事場の仕事をして居た。どんなにせわしい時でも、食事の前には必ず默禱しなければ、箸をとらなかつた。そしていつも題目を怠らなかつた。人呼んで日蓮と云つてゐた。

小野はだん〳〵讀書慾も增して、いくら讀んでも少しも頭が痛む樣なことはなくなつた。彼は一時間に、七八十頁の速力で、日曜の日等は六時間も打通して讀んでも、少しもつかれなかつた。殊

に書籍係であつた關係上、他のものよりも多く讀書の機會を與へられて居た。

『合掌の心』を讀んで、源信僧都の母の我が子に對する態度は、道を求めるものに對する良き敎訓であるのを知つた。『世界文學物語』を讀み、フランスの巨匠バルザツクが筆をとつては巨人の如き偉大さに驚嘆し、またダンテの『地獄篇』第五歌の悲歌に、胸を惱まされた。

漱石の作品は、再び彼に潤ひを與へた。若い時に手にしたのみで、實際運動に專心しては、まだ讀む機會がなかつた小野は、今幸ひにも、豐かなな藝術作品を心行く迄味ふことが出來た。子規の隨筆、歌論等は、小野を藝術の世界に再び引戻した。

あゝ思へば彼は左翼に走る前は、夜の目も休まず、文藝書を讀み耽つたものだつた。其の內でも有島武郎と島崎藤村を好み、ロシアの作家としては、ドストイエフスキーが一番好きで、殆んど一つ殘らず、讀み切つたのであつた。けれども左翼の作品は殆んど讀んだことがなかつた。

『七里老師語錄』、『淸澤滿之全集』、金子大榮の『彼岸の世界』、其他の著作、『島地大等全集』、それ等は小野の生命の糧となつた。彼はこうして、宗敎的書類に親しむ最も良き立場に惠まれたのを心から喜んだ。

秋はいつしか逝いて冬が來た。寒い日にも、彼は許された時間まで起きて居ること、運動とそれ

から生水を呑むことを怠らなかつた。手が凍える樣な日でも、大きなタンクの下で、水道の口を開けて、ガブ〳〵飲んだ、これがまた小野を健康にして、入獄前よりも體量は二貫目も增して、十六貫目以上になつた。

小野は囚人に對しても、看守に對しても、西式運動の宣傳をするので、いつも小野をからかふ看守が「西さん、西さん」と呼ぶのであつた。

消燈後は獄內は一層の沈靜と寂寥を重ねて行く。晝間の作業につかれて良く眠つてゐる人もあらう、入獄したばかりて、眠れずに悶々として苦んでゐる人もあるだらう。たゝ巡視する看守の足音のみが、かすかに小野の耳に響く時、小野の胸に浮ぶのは、農民のことであつた。

やうやくに桑やり終えてたすきながら
坐る夜更けにこうろぎ鳴くも

うつゝなく我が瞳醉ひたりと思ひつゝ
樂しき酒の盃はおく

日本短歌集の此の二首の歌を、幾度も繰返して讀みつゝ、じつと考へこんでゐるのであつた。

亡き母への手向け

長い間小野の師事したF師は、突然にI刑務所へ轉任されてしまつた。小野は一時は途方にくれる程の淋しさを感じたのであつた。

それは翌六年四月七日の夕刻のことであつた。佛壇の花を替えて貰いたいと、F師が言はれるので教誨堂に上つて行つた。そして花瓶の水を替え花をさしかえて、お供物をした。F師は靜かに一人讀經されて、無言のまゝで別れて行つた。小野は其の後に立つて、胸の中に、たまらぬ淋しさを抱いて見送るのであつた。

こうした悲しみも、またの逢ふ日を樂しみに、ともに同じ大信海の中に、入る日を思ふて自らを慰めた。

可憐な馬鈴薯の淡紫色の花を、四たび牢獄で見る時も過ぎて、故郷では春蘿も片付いたころ、平安の裡に送りつゝあつた獄中生活を、突如狂はせる事件が起つた。それは彼の母の死であつた。

『お母さま

貴女はとう〳〵私の歸りも待たず、おなくなりになりましたね。私が、あなたへの見舞狀を書かんとして居る時に、突然看守長殿から呼び出しがあり、あなたの死去された電報を渡されたのでした。あなたの御危篤の報に泣いた私は、もう涙も乾き切つてしまひました。

私は、あなたの病んで居る姿も見ない、またお亡くなりの姿も見ないので、まだ何だか生きて居らるゝ樣に思ふのです。私が出獄後、第一に獄中の色々の話しをお聞きして頂けると思つてゐたのに、あなたが此の世に居られぬことは、ほんとうに淋しいことです。

けれども死は一度は、社會に存在する生物の上に加えらるゝ不可避な運命で、必ず自分の上に、また自分の愛するものゝ上に、見なければなりません。

あなたとは、あんな悲しい別れ方をしました。それから姿をくらまして、三月十五日に檢擧されてから、病みつく日迄、私のために一日でも心配しなかつたことは無かつたでせう。

私が、もしルウソーの樣な、ありのまゝの懺悔錄を書いたなら、どんなに醜い人間であるか、ほんとうに驚きなさる位です。あなたは私を情深い人間であると信じておいでゞした。私が入獄した後も、わたしが子供の時から、お母さまにあまり逆はなかつたり、人に同情があつたと云つて、妹

の前で、いつも泣いて下すつたそうですね。

お母さま、本當にありがとうございます。そう云つて泣いて下さるのは、此の世では、あなたお一人だけです。けれどもお母さまは、私を買ひ被つて居られたのでした。それでも私は嬉しふ御座いました。

私の事件の豫審が決定になつて、信濃毎日新聞記者が、被告の家庭を訪問した時に、あなたは涙ぐんで、「あの奥の一間が、いつも陽一の居た所です。默り勝であつた陽一は、いつもあの部屋で、一人で本ばかり讀んで居たんです。」と話したり、「妹達が働いて呉れるので、家の生活はどうにかなります」と話したそうですね。お母さまは、新聞記者とは知らずに話されたそうですが、次の日には、『信濃毎日新聞』に「小野陽一の母は、涙ながらに語る」とて、如何に貴女が獄中の子を愛して居たかが出たそうですね。

私は獄中から出す手紙には、必ず「父母さま」か、又「御兩親さま」で、一度も、あなたの名だけを書いたことはありませんでした。でもあまりに私がお母さまを思ひ續けて居ることを書いて出すと、却つて貴女が悲しまれると思つたからです。ほんとうに、私が獄中でお母さまを、どれ程深く愛して居たかを、貴女の前でお打明けせぬうちに、お亡くなりになつたことは、諦めても諦められ

ぬことでした。

あなたは本が好きでしたね、農民の仕事が片付いた頃には、いつも夜は讀書して居らつしやいましたつけ。こゝ二三年は、貴女も眼鏡をお掛けなさいましたね。その時のお顏は、あの唐臼の死んだ叔父さんにそつくりでした。

夫に對しては、貴女は良き妻でした。私が知つてからは、たゞの一度も二人の中には爭ひはなかつたのですもの。入獄後の一家の生活——あの春蠶は、貴女が中心となつて活動されたから出來たのでした。

お母さま、私は今ほんとうに、自分を清算して出獄します。私は共産主義がイズムとして、絕對的なものでないことを知りました。それは差別の相の世界でした。それが平等海に統一さるべき、絕對眞理があるのです。

共産主義から見ますと、人間は一つの機械、一つの物質に過ぎませぬ、そこに個人の自由は認められませぬ。また藝術に對しても階級的に考へて、其の美の獨自性を認めてくれませぬ。こうした樣に世界を一つの型にはめて行くことが、如何に永久性がないかを證據たてるものです。

おそまきながら、これを知つた自分が、今阿彌陀如來におすがりする身にして頂いて居ることを、

感謝に堪えぬのです。今私は、あなたの死によつて、徒らに歎くことは致しません。

私は貴女の子として、澤山の負債があります。今それをお返しせぬ內に、あなたは、あの世の人となられました。自分は今あなたに報ずべき愛を、此の世の一切人類に捧げねばならぬのです。其の大慈悲に蘇らねばならぬのです。

私の愛するお母さま、今一度子供の時の樣に、「かあちやん」と呼ばせて下さい。そしてあの村の萬年堂の墓場に、永久にお眠りになる貴女の御體を、此の子に抱かせて下さい。

私は今御禮を申上ます。私が大なる愛に蘇ることにより、お母さまが、私の身の內に生きて居て下さることを——。

最後に私は、今の監獄法を改正して貰ひたいと思ふのです。北米ニユーヨーク州の行刑法規によりますと、親や妻子の危篤の場合は、死刑の執行を待つものゝ外は、歸省させると云ふことです、勿論死亡の場合には、葬儀に參列することも出來るのです。個人主義だと非難するアメリカに於て、それが許され、家族制度だと云はれる日本に於ては、これが許されてないのは、悲しいことに思ひます。私は自分の地上に於ける一番愛するものを失つたにつけても、私以外に、こうした歎きのある人のことを思ひ合はすと、このやうな法規が、一日も早く實現されることを、あなたの死を

前にして、ひたすら念願せずには居られませぬ。』

陽一より

母の死は小野にとりては、徹底的な打撃であつた。其のために彼は、二貫目も體重が減じだ程だつた。

けれども彼は信仰を得てゐたゝめに、この世の中に、何物もあてにならぬものであることを知つて居た。そして母の死を諦められぬと思ひつゝも、そこに安住の世界を見出して行つた。それは西行が歌へる

雲にたゞ今宵の月は任せてん　一
いとふとしてもはれぬものかは

この境地であつた。晝間は外で作業して、靜かな獨房に歸る時、それはほんとうに自分の時間であつた。獨房での小野は、色々と母の死に對する考へを進めて行つた。

性の解放

1

彼が居た獨房の二十間程先に、五六本の桐の木があつて、淡紫色の花をつけて居た。小野は朝夕それを眺めつゝ、自分の目を喜ばせてくれる其の桐に感謝した。

ほんとうに、いつ迄咲いてゐるのかしら、と思ふほどこの花は、大變に長く咲いて居た。獨房に歸る度に、心行くまで眺めて、安心した樣に落ちついた。だから朝夕それを眺めることが、小野の心を何よりも慰めてくれたのであつた。

けれども當時の小野は、獄中生活が恐しくなくなつて居たことも事實であつた。青春の期を、再び戻らざる青春を、牢獄に暮すと云ふ焦躁も、だん〳〵少くなつて行つた。今は健康上に於ても惠まれて居る、囚人としては自由な立場にある。殊に小野達四人の中の一番の嫌はれ者は出獄して、その後に若い朝鮮生れの頭の良い男が來た。四人の中は至極平和であつた。

一度は身に徹し、人生の悲哀をしみ〴〵味はつて、死の關門に迄行つたことのある彼にとり、そのドン底から起ち上つた體驗は、生死に對する十分の悟りが開けて、しかもそれが宗教的信念に依り一層强固なものにされた。今後は無期徒刑の宣告を受けるとも、健康を保つて生死卽涅槃と證知する境界に安住し得る所に達して居た。從つて彼は獄中にありて、獄中ならざる心持であつた。

しかし刑務所に馴れると云ふことも、それは宗教的信念から生じたものでないならば、一面恐るべきことであつた。何故ならば、これが惡人をして再犯を重ねしむるからだ。

多くのものは初犯として入獄した時には、家庭や故郷のこを考へたり、また自已の良心に苦しめられたりするのであるが、一たび苦惱の境を通り越すと、それは苦しみでなくなるのだ。境遇に慣れると云ふことは恐しいことだ。だから二犯以上になると、人間として最も苦痛な自由を拘束されることが、さほどに苦痛でなくなり、忍耐出來ることゝなるのだ。

初犯刑務所に於ては四〇%、重犯刑務所に於ては七〇%までが、出獄後再び暗黑の世界に落ちて行くことを思へば、暗然たらざるを得ないのである。

2

その頃の小野は、牢獄より受ける苦しみから解放されて居たのだ。前途の希望に燃え、滿身を流る〻赤い血は、社會的活動から遠ざかつてゐる小野の腕をうならせた。

けれども一面母の死によつて、小野は女性と云ふものを再び考へ出して來たのである。そこでこれに對する考へを、日夜進めて行つた。信仰を得てから、懺悔の心持で自分の過去を振り返つて見て、その行爲が淨化されて行くのを覺えるのであつた。

男と女、それがある以上、兩者は互に相寄らんとする、そこに戀愛の世界がある。小野は當時愛讀してゐた『萬葉集』等にも、戀歌の多いのは驚く程で、何れも眞劍なものばかりであつた。人生に此の潤ひがなかつたら、それこそ無味乾燥で、砂漠の樣なものであらう。けれども愛慾の世界には、當然種々の惱みが出て來るのであつた。青春の血に燃える若人は、傷つき合ひつ〻も、それをどうすることも出來ないのだ。

戀愛そのものには、獨自の使命は持つて居るが、それは一切ではない、即ち獨自な生命を持ちつ〻も、その獨占的、自已的愛は、全人的愛の下位に立たねばならぬものであつた。とは云ひ、その戀を永久にどうして否定し得よう。彼のダンテの「地獄篇」の有名な第五歌を讀んだ小野は、あまりにも恐しい世界——一切のものを踏みにじつた愛慾の世界を知つた。

ダンテはボーロとフランチエスカを、地獄の暴風雨の中に置いた。二人は相抱いたまゝ離れずに、風雨に吹かれて居た。愛情の世界を以て呼ぶ時に、二人の魂はダンテの側に來て、悲しき過ぎし日の物語をするのであつた。

『萬葉』の歌人はどうだらう、そこには素朴のまゝの、心緒が卒直に、虚僞や技巧なく表現されてれて居る。まことに戀心と云ふものは、宗教へも通ずるものであつた。吾等の血の中には、日本人特有の純情の血が流れて居るのであつた。

それが人の惱みを造るものとなるとしても、相愛せずに居られようか、人である以上性の惱みから脱却することは出來ぬのであつた。だから全々いけないものとして拒否することは、一部の人々に許されるとしても、萬人に望むことは出來ない。それを無理解に餘りに嚴格に限定せんとする時に、より大きな破綻が生ずるのだ。此の點に於てもトルストイの性慾論や、カンヂーの結婚觀にも誤謬がある、ガンヂーが、夫婦は精神的に同一の結合でなければならぬと云つたのは正しいが、性慾を否定し去つたのは誤りである。然るに親鸞聖人は、性の正しい理解者であつた。だが聖人は性の放縱を許したのではなかつた、人間的に正しく取扱つたのであつた。

戀愛は全人的愛に發展して初めて正しいものである。小野は獄中で、これまで自分が知り合つた

女性を批判して行つた。小野が愛を捧げつゝも、誤り多き道を歩んだのは、要するに純化された性でなかつたからだ。愛さんとしつゝも、その反面に裏切つて居たのは、大悲の世界に蘇つて居なかつたからだ。限られた小我の愛を以つてしては、すべてが虚僞であるのを知つた。

3

昭和二年に、小野は結婚問題に惱まされた。あの檢擧さるゝ前年に、須坂町から家に連れ戻されて、父母のすゝめる結婚を强要された時、母は一夜中泣き明したけれど、彼はどうしても、それを承諾し得なかつた。

その承諾出來なかつた大きな惱みは、水平社同人と自分の關係であつた。白藤一家を初め同人の兄弟に、殆ど親身の樣に親しかつた小野は、當然そこから歸納さるゝものは、同人との結婚と云ふ問題であつた。一般の人は口先ばかりで差別撤廢だと騒いでゐる。然るに小野こそ眞に自分達の味方であると彼等は信じてゐる。過去十年の間一度たりと同人を裏切らなかつた小野が、同人との結婚は無言のうちに約束されて居た樣なものだつた。

またそれに無關心である小野ではなかつた。今父母のすゝめる結婚を中心として、白藤夫妻は極

力小野に、妻帯して父母に安心を與へる様にすゝめた。そして

『あんたの心持さえ變らなければ――』

と二人は小野を、戀人に誓約させる様なことばで言つたのだつた。

この二人を、小野が裏切つたことを考へると悲しかつた。小野はそれにつけても、父母の結婚を承諾することも出來ぬし、さりとて他の女性に行くことも出來ぬ。そうかと云つて、同人兄弟の中に愛の對象者をも見出して居ない自分は、生木を火であぶられる様な苦しみだつたのである。

父母でさい、これを理解しなかつた位だから、他のものなどに判る筈がなかつた。結局彼一人惱んだ末、獄中から白藤夫婦に詫びたのであつた。

大信心を得る前には、自已のこうした追憶は苦しみこそ與へても、慰めを與へなかつた。けれども信仰の世界から、へりくだつた心持で見る時に、其の一つ一つが自分を生かしてくれた、みな善智識と見えるのであつた。

小野は獄中で汗みどろに働く勞働者の婦人に集團的愛を感じた。過去に於ける知已としての勞働婦人や、村の田畑で働いて居る小女等にも、一個人でなしに勞働する婦人全體を愛した。それにも増して、深雪さんを中心とした同人の女性等を愛した。そして最後に彼は囚人を子に持ち、兄に持

つ不幸な家庭の一女性を愛する自已を見出したのである。それは小野を「兄さん〳〵」と呼んで居た赤木葉子であつた。行方不明であつた彼女の兄が、一年の刑を受けて、T刑務所に入所したのを知るや、まだ若き身を勞働に捧げて、兄なき父母に仕へ、妹達を育んで居る彼女を思ひ出した時に出獄後の一生を、刑餘者に捧げんとする小野にとり、彼女こそ眞に理解ある同伴者であつた。

想ふに婦人の一般職業戰線への進出、また將來社會に於て、益々婦人の活動が要求され、婦人が要役割を果重すことは、歴史的必然であつた。そこに婦人に對しては、生理的差異を除いては、何れの點に於ても、男子と差別なきことは、勿論正しいと信じてゐる。

だが婦人の社會的進出は、必然的に從來の婦人より、男子と接觸する機會が多く與へられる。それについては先づ性の解放である。單なる性慾、夫婦と云ふ様な限定よりの解放である。

將來の社會が、婦人の協力なしには出來上らぬ以上。性から解放された男女の結合協力が、傷つき合はぬ世界を生み出すのだ。

4

昭和六年も暮に迫つて、小野の出獄は日に日に近づいて行つた。彼は語學を初めたりして、學問

的にも自己を完成せんとした。

其の頃の刑務所の囚人の扱ひは、小野の入獄當時よりずつと良くなつて來た。

先づ面會が多くなつた。書信も二ケ月に一回であつたのが、一ケ月に一回となり、有賞を持つて居た小野は、十五日に一回づゝ書く時間を與へられて居た。家から來る手紙は何回でも受刑者の手に這入つた。これは行刑が急速な角度を以て、改良されつゝあるのを物語つて居た。

十二月になつてからは、上級者、一級者は、別室に集つて茶話會を開いて、講話や、その時のニュースを聞いたり、ラヂオやレコードを聽いたりした。これは自由刑の執行を單なる機械的のやうでなしに、出獄を前にして社會的適格者たらしめやうとするためであつた。

それにつけても考へさせられることは、行刑法の改正である。行刑の目的は、單に受刑者に對し刑罰の執行を爲すのみでなしに、本質的に其の人を敎化改善せしめ、社會に同化して行く良民とすることである。

即ち行刑の本質は、懲罰的でなく、敎化主義でなければならぬと思ふ。成程罪人は國法に依り、夫々所定の刑期が與へられ、然して一定の刑を終へれば、また社會に送り出される。けれども單に此れだけであつては、刑務所は、其等の人々を一定の期間、社會より隔離して置いたゞけに過ぎぬ

のである。要するに應報刑より自由刑への歴史的な展開は、今や如何にして社會化されなければならぬのかの轉換期に臨んでゐるのだ。

かゝる點に於て、日本の監獄法は、明治四十二年に改定され、その後多少の修正を加へたに過ぎぬのであつた。だが、實際的には法の生きた取扱方に依りて、昔のまゝの監獄法が、少しは活用されて居るものゝ、根本的には行刑法の改正を希望してやまない。

將來の行刑が敎育刑であらねばならぬ關係上、看守ばたゞ戒護するだけでなしに、一個の敎育者とならねばならぬ。畢竟行刑は一つの敎育運動だ。從つて看守は、かゝる意義の下に養成されねばならぬことも當然のことゝなる。

將來の行刑は、單に刑務所だけに止らず、出撤者の社會生活の希望を約束するものでなければならぬのだから、行刑法と保護法とは離すべからざる問題となるのだ。そこに初めて明るい行刑が生れるのだ。

こうして彼は、行刑法の漸次改正されて行くことなどを念願し、將來に對する新しい希望を持つて、出獄の日を迎へつゝあつたのである。

獄を出て寒村を行く

1

昭和六年も押迫つた二十八日のことであつた。十一時三十分、上野發の新潟行夜行列車に乘込んだ小野は、今四年振りで、故山に歸るのであつた。

出獄の日にはF師が迎へに來て、その家に引取つて小野のために赤飯を炊いて下さつた。小野はそこで初めてF師の奥さんや、お孃さん等に會つた。その夜は微罪不起訴者の保護會、帝國更新會に落ちついた。

それは起訴猶豫處分となつて、檢事局から釋放される宿なく職なき多くの兄弟に、職を與へ、宿を與へ、又は歸里に歸住せしめて、彼等を光明へ導くための保護會であつた。小野はF師並に同會役員の溫かい情けによつて、會員として保護されるばかりでなく、同會の職員として、刑餘者としての自已の體驗から、そうした不幸な兄弟を友として働くことになつたのである。

今、彼は一週間の休暇を許されて、亡き母の墓參を兼ねて故山に歸るのであつた。この四年振りに歸る小野は、鄕里のことを考へると、その心持も暗かつた。今彼の歸つて行く故鄕には、入獄四年の間に、小野の出獄を誰よりも待ちわびてゐた最愛の母はゐなかつたのだ。また八十七になつてゐた祖母も、陽に逢ひたい〳〵と言ひつゞけて、陽一が檢擧された年に、永遠の旅に赴いてしまつたのだ。四年の歳月は小野の一家に、この激變を與へてゐた。

彼は獄中で諦められぬものは何一つなかつたが、たゞ母の死だけは、どう考へても諦められなかつたのだ。けれども諦められぬ中に、母の死を、ほんとうに意義あらしめることは、彼が大慈悲の世界に蘇つて、母の死が、彼にとりて諦められぬ世界を充たしてくれることであつた。

彼は車中で樣々の思ひに混亂してゐたが、母への追憶は、その大部分を領してゐた。汽車は高崎につく。こゝへは群馬縣水平社の事件で來たことがあつた所だ。一つ手前の倉賀野驛は、日本農民組合東京出張所の書記であり、勞働農民黨の常任委員である川村恒一が居る町だつた。

彼がT刑務所で、或る日部長面會をしてゐると、廊下に立つてゐる一人の男、よく見るとそれはI刑務所から押送されて來た川村恒一だつた。自分の荷物を前に置いて立つてゐた。一年振りで川村と會つた小野は、遠く離れてゐたので、目を見交しただけで、話は出來なかつた。

獄中で聞いた所に依ると、川村は解黨派になつたと云ふことだが、彼は眞面目な青年で、群馬共産黨事件に連坐して下獄したのだ。彼は、高津渡の無二の親友であつた。高津が病んで倒れてからは、同縣の左翼の運動を指導してゐたのだつた。彼は今どうしてゐるだらうか。こんなことを考へながら汽車の進むまゝに、横川驛を過ぎて、碓氷のトンネルのアプト式にかゝつて行つた。やがて輕井澤、小諸、上田を過ぎて、朝の六時半頃汽車は愈々屋代驛に着いた。

2

驛には、小野が入獄前一番親しかつた白藤夫妻を前にして、妹に弟達が見える。その他親類の人も二人、村の友人の信君も來てゐた。

しばしは無言であつた。深雪さんは

『陽一さんこゝですよ。』

彼女はよく見えぬ目を、小野に向けて物を探る樣な氣配であつた。小野はすゞ走つて行つて、その手を堅く握つて、

『私ですよ、判りましたか。』

小野は彼の眼病は、獄中での氣がかりであつたが、幾らかでも見えることは、せめてもの慰めであつた。

こゝから河東線の電車に乘り換へた。小野は側に掛けた一番少さい、九ツになる末の妹のハツ子に聲をかけた。

『ハツちやん大きくなつたな、よく來てくれたね。』

小野は心の中では、この妹を思つて泣いて居た。迎へに來た三人の妹の一人は、すでに他へ嫁いで、四ツになる可愛らしい女の兒を背負つてゐた。三番目の妹は、小野を見た時から、もう玉の樣な涙を流して居た。入獄四年の間、一家の重任を背負つて居た彼女の感激は、人一倍深いものがあつた。小野の心は、走馬燈のやうに次から次へと、思出を辿るのであつた。分れた時子供であつた弟は、十八になつて、もう一人前の體格であつた。九ツの妹も丈は一人前に伸びて、ゴム靴を履いてマントを羽織つて、落付かぬ顏で兄の顏を眺めてゐる恰好は、何となく淋しそうだつた。

二番目の妹も泣いてゐた。この二人の妹の泣いてゐるのは、待ちこがれてゐた四年振りで歸つた兄に會つたその喜びではなかつた。それは兄が歸つて來たのは嬉しいが、兄を一番待つてゐた母が居ないので、死に目にも逢へなかつた兄の心は、どんなに淋しいことだらう、もし母がゐたならば、

お互がどんなに喜ぶことだらう、それが胸一ぱいであつたらしいのだ。

二人の妹は、止めどもなく涙を拭つてゐたのである。九ツになる妹は淋しい中にも兄の來たことが嬉しかつた樣である。今日は學校に行くのを休んで、どうしても迎へに行くと云つて、四時頃に起きて來たとのことだつた。

小さい妹は、獄中で一番小野の心を動かして居た。ほんとうに幼ない時から素直で、友達にいつも泣かされる方であつた。それがまたいとしかつた。小野がその昔入營してゐた時の正月に、家に歸つたことがある。その時妹に負はれて驛まで迎へに來て居た彼女は、まだ二ツであつた。その可愛いらしい顏がどこまでも離れなかつた。母が死んだ後の家內ではこの子が一番いじらしく氣の毒であると、毎度妹からの便りにあつた。しかし最近の手紙には、父が母に代つて可愛がつて毎夜一緒に寢るので、淋しい影も少くなつた樣だと知らせてよこしたのであつた。

雨宮驛で下りた一行は、こゝで多數の親類や友人に迎へられて、四年振りに我家にと辿りついたのである。父は仲の間の炬燵にゐた。小野は久し振りに父の姿を見たが。それは大變に淋しそうであつた。あの丈夫で元氣に充ちてゐた顏も、メツキリ弱さを見せてゐる。それは我が子の入獄に引きつゞいて、祖母や、母を失つた不幸つゞきに、その精神的打擊が大きかつたゝめであつた。

『ほんとうに、長い間御心配をかけてすみませんでした。』

小野は父の前に詫を云つて挨拶をした時、熱い涙が止めどもなく頰を傳はるのであつた。

『母も死んだのだから、これからは心を入れかへて、家の面倒を見る樣にしてくれなけりや。』

父は、そう云つた外には何も云はなかつた。

小野は父の前をたつて、先づ母の戒名の供へてある佛壇に進んだ。「採室貞順大姉　昭和六年七月十八日沒、俗名小野福、行年五十四歲」この位牌に對して、まだ新しい涙がわく。

小野は、かすかに念佛を唱へつゝ合掌した。それから少さい妹を伴れて、母の永遠に眠る墓地に行つた。母の前に、祖母の前に香を供へ、花を捧げて、暫くは返らぬ昔を思ひ出すのであつた。

3

小野は今ハツキリと、あの時のことが思ひ出されて來る。母が發病して十日目位に、家からは初めて知らせて來た。引きつゞく二通の手紙は、I刑務所のF師の許に來たので、F師はT刑務所のK教務主任を訪ねて、小野に知らせてくれとのことであつた。最初の手紙には、本人に知らせぬようにとの賴みであつたが、二度目のそれには、病氣も重態であるから、一切を知らせてほしいとの

ことであつた。

K教誨師から渡された二通の手紙を讀み行く小野の身體は、硬直して、たゞ止めどもなく涙の流れるのをどうすることも出來なかつた。

もう駄目だ！　小野の心は絶望に閉されてしまつた。深い谷底につき落された樣に。その年は毎日〳〵續いて雨ばかり降つて、嫌な天氣が續いてゐた。たゞさへ憂鬱にとざゝれた小野の頭は、一層重かつた。

手紙に依ると、母は或る日急に高熱を出して寢たが、次の日から吐いたり下したりで、ビドイ苦しみやうだつた。診察の結果は、急性腦膜炎であつた。母はしきりに頭部の劇痛と、頸部の强直を訴えた。そしてその日からどつと床についてしまつたのである。今の所頗る重態である。それにつけても、母の氣にかゝるのは兄のことだ。息のあるうちに一目でも會ふことが出來たら——こう云ふのが手紙の大意だつた。

急性腦膜炎、この病名は小野を一層不安にさせた。それは不治とさへ云はれてゐる、また治つた所が、身體のどこかが不具になるか、また白痴になるとか、どうしても元通りの完全な身體にはなれないのだ。こういふ例は澤山ある。だから全治しても四年前に別れたまゝの、母の姿を見ること

は再びあり得ぬことが十分に想像される。

彼はどうしても獄中で、母と別れねばならぬ運命と思つた。たとひ一目でも會つて安心を與へたい。けれども法は嚴然として存してゐる。それを曲けることは出來ない。出ることは駄目だ。病勢は進行する、もう意識を失つてゐるだらう、がどんな馬鹿になつてもいゝから生きて居てくれ、どんなに魂のない拔け骸として殘つてゐても、生ける屍に對しても、今後の一切のものを犧牲にして、孝養を盡したい。

そうなれば社會的地位とか、社會的の活動などは弊履の如く捨て去るであらう。

母は、この不孝の子のために、どんなに心を痛めたであらう。入獄前に心勞をかけたことでも並大抵ではなかつた。その上に入獄前に變な殘り惜しい別れ方をしてゐる。昭和二年の十二月十八日に、須坂町で開催された河東三郡の青年研究大會に出席した小野は、臨席した須坂署長から、一日中言論を封じられてしまつた。其の夜道田の所に行つてゐた所を、村から父の親友——そして小野とも極く親しかつたKさんと叔父が、連れ戻しに來た。警察の檢束には恐れぬ小野も、これにはすつかり參つてしまつた。とう〳〵須坂から連れ戻されてしまつた。

其の夜は叔父の猛烈なる攻擊を受けた。夫れは父母の定めた女と結婚しろと云ふのであつた。

『俺がせめて自作農の階級なら兎に角だが、小作してゐる今の身分ぢや、早く嫁でも貰つて、お前が働いてくれなけりや、第一食べていかれねーぢやねーか、お前がたつて無産運動をしたいなら、忙しい夏だけ家で働いて、ひまな冬には、夫婦で運動に飛びまはつてもいゝから。』

こう父は云ふのであつたが、叔父は暴力を持つても家に置こうとするのであつた。その夜は朝方まで一睡もせず苦しめられた。母は母で一晩中泣き通しだつた。

『わたしは、この一二年はメッキリ弱くなつたから、もう長くは生きられねーよ。お前はそんなに親不孝をするんなら、わたしを殺して出て行つてくれ——』

いつも感情の激發したことのない母も、この時ばかりはスツカリ取亂して泣いてゐた。五ツになつた妹は、寢もやらず、心配そうに母の側で兄の顏を眺めて居た。その朝方に、小野はそれを拒んで、母の涙も踏みにじつて、家を出ようとした。叔父はその時小野を暴力で取押えて、どうしても離さなかつた。そして、とう〳〵叔父の家に監禁されてしまつたのだ。小野は三日目に一時のがれに、それを承諾して家に歸してもらつて、勞農黨支部聯合會の委員會に出席し、正式に中央委員として選任されたことを承諾し、一月七日に上京したのであつた。そして家には結婚の拒絶電報を打つたのであつた。

上京する迄の一週間程は、家に起臥してゐた。母は淋しい顏をしてゐた。それでも小野のために何かと心配してくれてゐた。七日に家を出る時、小野は固い決意をもつてゐたので、此の家も當分見收めだと思ふと、感慨無量であつた。こうして母と別れて、檢擧さるゝに至つたのである。

それだけに母との別れは、悲劇的なものであつた。小野が入獄して以來、母は八幡さまに月詣りすることや、毎日どんな食物でも、自分で食べる前に、小野の蔭膳に供へることを忘れなかつた。そして歸りを待つて居たのだ。それだけに小野は母のことを忘れ難かつた。妹からの便りにも、母は兄の歸る用意にと、自分で繰糸して、もう五反程を織り上げたとのこと、それも母が我が子への心づくしであつた。

小野は獄中で、母のためであるならば、どんなに同志からのゝしられても、裏切者めと云はれても、少しも苦しくないと思つてゐた程であつた。

家から來た手紙——續いて二度も來た便りには、母の容體は、日に增し惡くなるといふのであつた。もう人の見さかいもなく、唯變なうわ言ばかり云つてゐるとのことであつた。

七月の十九日、母の死の電報を受取るまで、小野は不安ながらも一つの希望を持つてゐたが、それも果敢なき夢だつた。とう〳〵母は死んだのだ。もうどうにもならない、一時は身も世もあらぬ

悲しさであつた。

その日から三日間免業となつて、獨房に收容されて弔意を表することになつた。狹い一室に這入つた小野は、ろくに物も食べられなかつた。彼は「眞宗聖典」と「萬葉集」を手にして悶々としてゐた。萬葉には挽歌として、死をいためる歌も可なりあつた。その頃の歌人は、死に逢える悲しみを率直にありのまゝに歌つてゐる。古にありし其等のことは、人間の上に永久に烙印されて、逃るゝことが出來ぬものであつた。絶え間なく海岸に打寄する波のやうに、死は人生の上に襲ひ來るものであつた。

母の死は諦められない、獄中で信仰を喜びつゝも、小野はどうしても諦められなかつた。諦められぬうちに小野は諦めの世界を見た。獄中で獲得したものは、死に對する悟りであつた。小野は何時死ぬとも、それに對して殘り惜しさを持つてゐても、其處には一流の悟りの世界があつた。だから死なる世界は、何でもないことであつた。自らは罪惡生死の凡夫であるが。生死卽涅槃なる信仰に立脚してゐた。だから死其のものは何等の苦痛なものでなかつた、たゞ自らは業報にさしまかせ、死ぬべき時には死ぬる境地に到達してゐた。

けれども母の死は、小野に決定的な打擊を與へてしまつた。一時は此の世の希望すら失つた程で

ある、だが小野は其處に止まつてゐなかつた。どうしても償ふことの出來ぬ母への責任は、親子の對象的な愛から出發して、其處に止まつてゐる時には解決されなかつた。けれども一度一切群生海の中に沒入した時に、その大悲の世界へ蘇つた時に、そこに眞の孝養が遂げらるゝのであつた。今小野は母の死によつて、母の死を眞に意義あらしむるのは、凡ての人類愛に蘇つてのみ、それは可能であるのを知つた。もしそうしたら、六道四生の間如何なる業苦に沈めりとも、神通方便を持つて有緣を度することが出來るのだ。親鸞聖人のお言葉を聞こう。

「一切の有情は皆世々生々の父母兄弟なり、何れも〳〵この順次生に佛になりて、たすけさうらふべきなり、」

とある。

此の世界に入つてのみ、それが眞の孝行であつた。從つて信仰によるのみが、眞の孝行であつたのだ。母の死は小野に悲しみと失望を與へたが、それよりもつと深い世界の親子觀を得ることが出來たのだ。

小野は妹達の話を中心として、母の死に至るまでを詳に聞いた。六月十八日に發病した母は、最初はヒドク苦しんだが、それでも當時は意識を失はなかつた。見舞に行つた人々に、我が子のため

に春に織つた布を五反出して見せて、

『陽一も、今年の暮には刑務所から出るから、用意しておくんですよ。』

と云つてゐたとか——。

病勢が日一日と重くなると、腰部の劇痛を訴えた。意識が明かな時もあるが、不明な時が多かつた。大分悪くなつて來たので、二人の母の姉が見舞に來て、

『もう陽一も、間もなく歸つて來るのだから、心配しないで早くよくなりな。』

と云つた時

『いくら歸つて來る、歸つて來るなんて云つても、すこしも歸つて來ないんだもの——』

と云つてゐたそうだ。神奈川縣のT町の製糸工場から二人の妹が歸つて來て、大きな妹が子を負つて、母が目を開いた時枕元へ行つて、「母さん歸つて來た」と云つたら、母は

『やだナ、お前はどうして子供なんど出かしたんだい、困るナー。』

そう云つて泣いた。妹はそうぢやない、これは二番目の妹の子だと云つたら、やつと安心したそうだ。かゝるうちにも、遠くに働かせておく子に對する、母の心配がうかがはれた。

またある日、熱にうかされて、

『うちの陽一は、貧乏人に生れたから、氣がひがんであんな仲間には入つたのだと思つてたら、この頃の新聞には、金持の息子や、大學生などが、大勢あげられてゐる所を見ると、あながち貧乏だから、あんな仲間入りをしたのだときめられもしねーな。』

などとも云つたそうだ。

いま小野の前に殘されたものは、母の死面を父が、小野のためにと撮影した寫眞だけであつた。

4

小野が歸つた翌日に、歸るべき筈だつた遠いT町の工場に行つてゐる妹達は一日遲れて、その次の日に歸つて來た。久し振で逢つた妹達の何れも大きくなつたのに驚いた。

妹を迎へに行つた父は、驚いて青くなつて歸つて來た。

『人を馬鹿にして、開いた口がふさがらねー、あんまりひどいぢやねーか、人の子供を一年中こき使つて、これぢや殆んどたゞ奉公の樣なもんだ。』

怒つた聲で父はつぶやいた。

妹達は工場勞働者として、優秀な技倆を持つてゐた。小さい方は昭和三年、小野の入獄した年に

は、三百五十人程の工場で第一番の成績で、月に五十圓以上の稼ぎをし、その前の二年には僅か十六の若年で、四百圓の働きをして來たのであつた。

それが今年の勘定はどうであらう。しかも二人で僅か二百圓足らずであつた。それも本人等に對し、いつも明示すべき工場手帳は、一度も見せたことはなかつた。そして工場手帳を渡さずに、その合計額のみを記入した紙片を渡し、閉業の前日工女一同を集め、總稼高の内二割五分は、强請的に會社に寄附させ、二割五分は後勘定にしたのだ。

既に稼高の方でゴマカして、工場手帳をも見せずに置きながら、その稼ぎ高の半分もまた支拂はないのだ。だから妹達二人は母の病氣で歸つた時の前借り四十圓を差引かれると、實際持つて來た金は四十圓足らずのものであつた。父が驚いたのも無理はない。余りにブルジョアのからくりの甚しいのに、一驚を喫した。これは妹達ばかりではなかつた。歸りの旅費のみ貰つて、荷物の樣に家に歸されたものもあつた。だからあるものは、賃銀の支拂がすむまでは歸らぬと頑張つて、工場にゐるものもあつた。安くも工賃を滿足に支拂つたのは、組合製糸を除いては數へる程しかないのであつた。

此の事件は、長野縣の貧農に恐慌の嵐を吹送つた。彼等は生活に窮した、拂ふべき所にもにも拂

はれなかつた。金融は硬塞してしまつた。信用組合の如きも、そうなつては一時支拂を停止した。昭和六年の暮の農村は、十圓の金の用意にも大變に至難なことだつた。

それのみでない、打續く不況に、農村經濟は危殆に頻してゐた。農産物は安く、殊に生糸の順次の暴落は、繭値を二圓以下まで押下げたので、農民は勢ひ行詰らざるを得ない。税金の怠納——之れによつて起る村や、縣の經濟上の赤字は度を進めるだけで、教員の給料を支拂ふことすら出來ぬのだ。

かくて農家の負債は年々激增した。昭和六年には全國農家の負債は、六十億に達したと云はれてゐる。疲弊した長野縣の農村は、もうこれ以上借金は出來ぬ、無盡は停止する。殊に六年の信濃銀行の倒壞は、縣下の金融を根本的に破滅に陷入らしめた。

農民よ、何處に行く？　これが小野の出獄した時の農村の現狀であつた。

5

四年振りに見た故郷の自然は、其のまゝの姿であつた。前に見える遠いアルプスの連山も、其の姿は幾千年前からの其のまゝを現してゐる。戸隱の山々の雪に太陽が投げた光りは、あたかも今朝

初めて見たやうな感じであつた。冠着の山々は、更級郡の山に住む人達の炭を焼く煙を一文字にたなびかせて、入獄した時と同じ姿を見せてゐる。

我が村の山腹から眺めた善光寺平、こうしたものを眺める眼には、四年の長いタイムも少しも變つた様に思へぬのであつた。

良寛和尚のものを、獄中で愛讀して、或る時は、裏山に庵を結ばうかと考へたりした所にも登つて見た。それは日當りの良い所で、まだ雪が無かつたので朝早く登れたのだ。延々と長蛇の如く流れてゐる千曲川を中心として、その兩側に展開する寒村を見渡したのであつた。たゞ變りなく見えるのは、自然ばかりであつた。この自然に惠まれてゐた村々にも、今は農民の苦悶のうめきが、手にとる如く聞えて來るやうに思へた。

『ほんとうに大した變り方だ――』

思はず獨語せざるを得なかつた。一つ〳〵について見れば、大變な變りかただつた。

六十年の生涯を土と親しんで、ほんとうの水呑百姓で通したすぐ隣り南澤の源さんも、亡き人になつてゐた。

源さんは、働いたものだつた。魚などは月に一度位しか食べたことのない、殆んど自給自足であ

つた。そして粒々辛苦の結果、僅かばかりの金を貯めたが、それも食ひこんでしまつて、此の不況に村人の苦むのを目撃しつゝ死んで行つた。

小野の二三軒前に、日頃親しくしてゐた青木、それは小作人で、小作組合の幹部でもあつた。その長男で、小野を兄さん〳〵と呼んでゐた幸吉も、二十才の若い身で縊死したとか、彼は一寸した事件で警察に拘留され、一度釋放されたが、再び出頭の通知を受けたので、悲觀してその前夜、首を縊つて死んで行つたのだ。これもみすゞ刈る信濃の山國の悲しき物語りの一つであつた。

そういふ中にも、最も小野を悲しませたのは、山の大人の不幸だつた。小野の家ではすぐ其の側に、千坪程の小作をしてゐたので、畑に行くついでに、その家で茶飲話をすることが度々だつた。

『おうい陽さあん。』

『なんだ、山の大人。』

小野はいつもこう呼んでゐた。彼は小野より十五六も年長だつたが、とても仲が良かつた。そして小野が村に小作人組合をたてる時も、第一番に應援し組合員となつた一人だ。

いつも畑にゐると、下から大人が呼ぶ、小野は鍬を手にして下りて來る。土間になつた入口の外の所に、むしろを敷いて、二人は手も洗はずに、土だらけの手で漬物をムシヤ〳〵食ひながら、澁

茶をすゝつて、よく話合つたものだつた。彼は酒好だつたので、酒もよく飲み會つた。

妹は小野に語つた。

『山の家でも、トテモ不幸が續いたんですよ。兄さんの好きな姉の方は、去年の暮に病氣で工場からら歸つて間もなく死ぬし、叔母さんはいろんなことを心配したので、ドツト床に就いてしまふ、やつと良くなりかけたら、また三番目の娘が工合が悪いと云つて、工場から六月頃に歸つて來て、姉と同じやうに胸の病で、とうとう十月の末に死んでしまつたんですよ。』

二人とも十三の小學校を卒業した時から、製糸工場に働きに出ねばならなかつた。あの運動不足と不良の空氣と日光に惠まれぬ長時間の工場勞働は、この二人の若い娘をも、工場の人柱としてしまつたのであつた。

『信濃銀行が倒壞したので、村の大地主の××さ、それ君が小作組合運動當時の相手さ。とうとう三萬圓ほどふいにしてしまつたよ。あんな大きな地主達は別として、食ふや食はずの外の小さな人達は、ほんとうに氣の毒だつた。汗水たらしてためた預金が、煙になつたんだからナ、こんな騷ぎで村の金融は極度に行詰つてしまつたのだ。』

或る友人は、こう小野に話し出した。そして

『全くひどいよ、去年など蠶を飼つてみんな損したんだ。村の稅金はまるで收まらないし、教員に支拂ふ金もない始末だ。このまゝで今年一年續いたら、それこそ人間の干物が出來るよ。もうこうなつちや何も拂はずに、自分で取つたものを食つて行くより仕方がないんだ。』

こんな話を聞いた小野が、村の親類や友達の所を歩いた時に、何れもかまけばなしばかりだつた。もと村の小作組合の幹部だつた吉田清作の娘——それは二十の娘さかりといふのに、まるで蠟細工の樣にすき通つた痩せた體をしてゐるのも、涙なしには見られなかつた。

村の人々の間にも、いろんな爭ひ事は絶えなかつた。親類同志の間にも、あれがこう云つたとか、誰がどうしたとか、と末葉の問題で爭つてゐるのだ。今この悲境に沈んでゐる農村を見るにつけ、これは自分の問題として、解決に努力せねばならぬと同時に、こうした俗社會の紛爭にも手を着けねばならぬと覺悟した。

6

三日目にに九ツなるハツ子を連れて、長野に行くことになつた。妹とその子の四ツになる房子と四人だつた。六疊の室を借りてゐる妹達夫婦の部屋に辿りついた時、妹の夫の稻村は仕事に疲れた

とて横になつてゐた。二人にとつては四年振りの面會だつた。

この妹の結婚は、小野が入獄の前年だつた。其の日は農民運動の戰線から呼び戻されて、式に立會はねばならなかつた。式の翌日北海道に出立する若夫婦を、松代町の乘合自動車の發車場で送つたことを覺えてゐる。年老えた父も一緒に。

『ナアに昔の樣でねい、北海道だつて此の節は汽車ですぐ來られるからなア。』

といふやうなことで、二人の前途を祝福するのであつた。大きな希望を抱いて北海道に渡つた妹達も失敗して、一昨年に國に歸り、妹だけは暫くの間、生家に來てゐたのだが、二ケ月前位から、二人は間借りの一家を持つたのであつた。

『おゝ珍らしいお客さんだ。』

稻村は、はね起きながら、小野の顏を眺めて言つた。

『そう大して痞せなかつたですね。つい御無沙汰で……』

妹は色々と酒肴の用意をしてくれて、二人は久し振で酒を汲み交した。

『わし、今晩どうしても、長野の原田の所へ挨拶に行かねばならぬから、一寸行つて來るよ。』

小野は縣町をずん〳〵上つて行つた。此の道は運動に飛び廻つてゐた當時、何百回となく往復し

て、鬪爭の歩みを續けてゐた思出の深い所だつた。

原田はあいにく留守だつたが、妻のよねさんがゐた。

『控訴しないなんて、そんな馬鹿なことがあるものですか、家の人が、若し陽一が、そんなことを云つたら、おこれ、と云つてゐましたよ。』

氣丈な彼女は、こう言つて小野を、しきりに勵したのであつた。

『でも、わし頭の工合が、どうかしてゐるんで。』

『だつて、あんまり高いぢやないか、せい〳〵一年半位よ、確にまかるから控訴しなさい。』

『じやそうするか。』

こうした會話で彼女と別れたのが、三年前の昭和三年十一月十一日の判決言渡しの日であつた。

『陽さん、しばらくでしたねー、でも達者で……』

そう云つてゐる所へ、十になる文子が飛んで來た。

『あゝ陽ぢやんだ、かあちやん陽ぢやんは何してあんな所に行つてゐたの。』

原田の所で此の子を見るのも、樂しい一つであつた。小野は原田一家と知り會つてから、よく泊めてもらつた。また北信一般勞働者組合の爭議の時など、長いこと泊り續けてゐた。文子は、よく

なついて、小野を「ぢやん〳〵」といふので、原田夫婦も、いつとなしに小野を「陽ぢやん」と呼び習らしてゐた。

間もなく原田が歸つて來た。入獄後の北信の運動も、昨日の若宮と、今日の原田の話を綜合して見て、初めてよくわかつた。

『そうか、それじや北信でも、俺達の當時から運動してゐるのは、若宮と道田だけじやないか。若宮は、俺が下獄するまでは三・一五からずつと運動を離れてゐたので、いま運動をやつてゐるか、どうか知らなかつたのだ。』

『あの時運動をやめてゐやがつて、奴等三・一五の被告事件の時だつて、俺一人に心配させていて、こんどは俺の一寸した過失をとらいて、除名するなんて騷ぎやがつたが、俺はもう奴等とは會はないと言つて、こつちから御免蒙つた。北信の運動ももう昔の樣じやないんだよ。』

およねさんは、そばからこう言つた。

『あんたの事件から後、例の四・一六でしよう。あれでまたみんな來てゐたんだが、あの事件ではどうも、長野縣が黨に對して、非常に不利の立場に立つたんですよ、階級的にね。何んでも市見が東京の事務局から多數の印刷物を貰つて來て、それを大部分はしまつておいたらしいが、其

の一部を上諏訪の××に手交した。所が其の時はもうスパイがついてゐたらしいんですよ。それで二人は逃げたけれど、一人はとう〳〵逃げ切れず、桑畑の中に印刷物を放りこんだりしたが、とうとうつかまつたので、直に市見も檢擧されたんです。それは四・一六の前だからね。それから市見は高等刑事に連れられたまゝ東京へ送られて、どこでどうして印刷物を貰つたかを追求されたんですつて。それから四・一六の檢擧でしやう。だから黨の本部とすれば、惡く言ふのも無理はありませんよ。それから例のウルトラ事件ですよ。其の時の黨の人もあまりいくぢはなかつた樣ですね。』

小野は昨日若宮と、村から屋代に行く道を、歩るきながら話してゐたことを思ひ出した。小野の家を訪ねた若宮は、北信の運動狀勢について、二時間ほど話してくれた。そして北信の左翼の運動は、殆んど自分一人が責任を負つてゐると言つてゐた。神津退き、須坂の宮前もまた運動から離れてゐた。また小野と三羽烏だつた堀田、彼もどこかの藥屋の入婿となつてしまつた。それでも小作組合は、活潑な運動をしてゐるらしかつた。けれども、それも全國的に見て、左右兩翼の對立が激化してゐる。全國農民會議泒の下に立こもる左翼——長野縣の日本農民組合聯合會は左翼であつたが——それ等の左右の對立は、全國的に農民組合運動の勢力を分けてしまつてゐた。

小野は、自分が生みの親でもある長野縣の農民運動の狀態を聞いて、心熱くなるのであつたが、彼は方向轉換者としての自分を顧みて、それを冷靜に聞き流してゐた。

『けれども、俺はもう運動は斷然しないよ。』

小野は若宮に、こう言ひ切つた。若宮も

『俺も實は體の工合が惡いから、何とか適當な後繼者が出來たら運動を退きたいのだ。しかし俺は、そうしたら無の生活に這入るよ。宮澤も、羽生も戰線は離れたけれど、他へは行かなかつたらしい。羽生も一時大衆黨へ行つたが、それは誤りだと訂正したんだから。』

小野は、それを今思出した。そして原田に

『だから俺だつて、外の同志からは意久地がないの裏切者だと云はれても、自分がマルキシズムを信奉することが出來ぬ以上止むを得ないのだ。しかし、それは民衆と自分との生活の絶緣ではない。マルキシズムにもまして、光明を把握さるゝものがあるならば、自分は勇敢に其の誤謬を批判して、進むべき道に行くのが正しいと思ふのさ。』

すると原田夫妻は、こう云ふのであつた。

『陽一は坊主になつて、たゞありがたがつてゐるとか、阿彌陀さまがありがたいとか、ソンナ抹

香くさいことばかり言つてゐるから、問題にならん男だと言つてゐるんだよ。』

『ソリヤ其の人達から見れば信仰をはき違いてゐるんですよ、宗教を迷信や阿片位にアツサリ片つける人にとつては、何でも信仰に入ると、お經をあげて念佛を唱へ、死人の世話をしてお布施を貰ふ人達だと思ふだらうが、それこそ大きな誤りだ。宗教は決してソンナものじやないんだ。今の宗教は形式ばかり殘つて、本質は忘れられてゐるのさ。宗教の本質は一時代、一國家的のものでなしに、一つの眞理を求める心だ、實相と個人との合一だ、自らの內に佛心を見ることだ。此の心がまた一切群生海の心なのだ。だから信仰に入つたことが、現在の資本主義社會の擁護にあるのじやない。資本主義社會に於ける物慾こそ、宗教と相反的なものだ。人には、どんな世間の動搖にも動かぬ一つの信念がなかつたら、なに一つ出來るものではない。殊に農民の生活は宗教なしには荒んで來るのだ。わしは上京はするが、上京したからと云つて、決して農民のことを忘れてはゐないよ、だからちみな建設的方面に、今後の生活を捧げる決心をしてゐるのだ。』

7

その夜遲く、妹の所に歸つて來た。翌日は篠井町、唐臼の亡母の里方へと行つた。それから南條

村の親類である酒井幸三郎の所へ行つた。其の日は、もう夜であつた。歩きつかれた小野が訪ねると、みんなして喜んで迎へてくれた。

『まあ』

従妹の幾世は、病後のやつれを見せた顔をして迎へた。其の面には小野に對する四年の忍苦をいたわる心が滲み出てゐた。

酒はいけぬと言ふのに出してくれた。それから獄中の思出話しに花が咲いて來た。

幾世の妹も其の二人までが、遠くに行つて働いてゐたのだつた。そして殆ど賃銀の不拂のまゝ戻つて來たのだ。幾世の父は

『陽一さん、世の中も暗闇ですな。働いた金をろくに拂はないなんて、一年中セツセと劇しい長時間の勞働をして、そして十圓や二十圓そこ〳〵では、着物代や小遣錢にもなりやしないじやないですか。まあ弱つた世の中ですナ、これじや借金なんか一文も返すところか、食つちやいかれやしませんよ。おまけに信用組合も、もう支拂停止で、預けておく金かとれんのだから、まア、慘憺たるものですね。わしの村でも澤山の工女も出てゐますが、唯の一人滿足に金をもつて來たものはないんです。銀さんの所などでは、娘達が歸つて來ると云ふので、持つて歸る賃　を當込

みに正月の糯米を米屋から借りて、ほとば（水浸）しておいたんでしやう。ところが娘は一文も持つて來ない、娘はソンナ金を拂ふ金がないから糯米を米屋に返してくれと云ふのでしやう。返すと云つても、もう水に浸した後では、どうにも出來ないので、娘はワン〳〵泣いてしまふと云ふ騒ぎで、目も當られないんですよ。工場主も愈々となると、ひどいことをするもんですね、大切な人の娘を一年中こツぴどく使へ倒して、ろくに金も拂はずに、まるで荷物でも送り屆ける樣にして、挨拶もぜずに歸すんですからね。』

それでも、こんな苦しい中から、父子は小野に酒をすゝめた。空腹に久し振りに牢獄から出て、歩きつかれた小野は、すつかり醉つてしまつて、いつの間にか眠つて、床を敷いて貰つたのも、覺えてゐなかつた。

朝起きて見たら、枕元に幾世が坐つてゐた。彼女は少時間二人で話す機會を作つたのだ。

『大變に病んだんだつてね、もういゝの。』

彼女の顏色はあまり良くなかつた。三年以上もブラ〳〵してゐるのだ。

『でも御無事で』

彼女はそれ以上何も云へなかつた。小野の歸つて來たことを喜ぶことで胸が一パイであつた。

其の日も過ぎて、小野はもう上京の準備で忙しかつた。妹の心づくしで蒲團も一組出來た。古い寫眞のアルバムも見つかつた。また檢擧された日、刑務所まで着て行つたコールテンの上着も、どこかの隅から出て來たが、胸には勞農黨のマークはついて居なかつた。

四日の夜は、村の友達を家に招いて別宴を開いた。みんな小野がコンミニストたることを止めたので心よく迎いてくれた。小野はどこへ行つても、刑餘者として受ける不遇な地位には少しも置かれてゐなかつた。村人の交際も異つてゐなかつた。村の役場に居た時、軍事教育反對運動で、ソコを追はれて以來、村の地主連中とは反對の立場に立つてしまつのだが、それでも彼等は個人として小野を憎んではゐなかつた。

五日の朝の雨宮驛には、村長や小學校の先生、友人親類等二十人もの見送を受けて、車中の人となつた小野は、一人感激に浸るのであつた。そして村のため、農民のために、出來るだけの努力をしやうと誓ふのであつた。

東天を仰ぎて

1

上京した小野は、農村の行詰りと形態こそ異なれ、大東京の暗黑の裏面を知つた。十五萬に及ぶ失業者の群、不定居的プロレタリアート、所謂浮浪者の莫大な大衆、生活に窮迫せる小市民階級、そして此等の急迫せる大衆を縫ひつゝ、カフエーと魔窟の激增するのを見た。

農村の不況による購買力の激減、世界不況による海外貿易の不振は、動すことの出來ぬ因果關係を持つて、都會居住者にも迫りつゝある。小野は犯罪者の群を通して、主として大東京の浮浪者の群を見た。そこには產業恐慌による長時に亘る失業から、最底の生活を余儀なくされてゐる大衆があつた。

木賃宿に一萬餘、公私宿泊所に五千、その外宿なく野宿するものだけにても、二千五百餘人を算してゐた。一日二十錢や三十錢の最小賃銀を得て居るバタヤ(屑拾ひ)だけでも、二萬に近い大衆の

うごめいて居るのを見た。

小野は先づ起訴猶豫者並に執行猶豫者の保護事業に働くことにより、實踐的に生きる自己の道を見出して行つた。人には色々の生き方がある。政治運動に從事するばかりが、社會運動ではなかつた。小野は先づ現實の地味な問題から、一人一人のため自己の精力を傾け盡す道を考へた。

都會の裏面を見た小野は、社會の改革されねばならぬ種々の相を、至る所に見た。惠まれぬ兄弟姉妹への愛は、同時に一切の人類は、世々生々の父母兄弟であると云ふ、宗教の世界に這入つてのみ、それが純化された眞實の愛であつた。今都會にある小野は、都會のことに働いて居ても、農民を忘れては居ない。小野は將來農地を得て、それを中心として、一度罪に陷りしものゝ、人生案內者となると同時に、此の農園が、日本の農村に何物かを投げ與へる契機となるものでありたいことを念願してゐる。小野はどこ迄も農民としての見地から、自分の生活を規定して行きたい。

宗教に對しては、信の世界のみ、人間生活を眞實化するものであると信じた。鬪爭よりは建設的に——。けれども大悲菩薩の一殺とか、場合に依りては、また一命を世のために致すことを恐るゝものではないのだ。

働くものゝ幸福な社會——これは何れの世に於ても望まねばならぬことであるのだ、だがそれは

マルキストの云ふ、單なる社會變革に依り、爲し遂げらるゝものではなかつた。

小野の今後の生活の前提を爲すものは、先づ日本國民と云ふ意識である。そこから世界過程へ出發すべきだ。

小野は働く勞働者や農民が、社會の眞の支柱となり、同時に生活が保障されねばならぬ世界を信ずる。また婦人も從來の立場より離れて、人格的に男子と平等の地位に置かれねばならぬことを思ふ。差別の撤廢、教育の機會均等、其他種々のことが、吾々の前途に殘されて居る。それは國民の協力一致により、必ず成し遂げらるゝことであらう。小野は信仰を把握した勞働者、農民が、眞の日本精神の繼承者であると信じて居る。

2

最後に考へる。マルキストと現在の自分との根本的差異は何であらうか、それに對する本質的なことを述べねばならぬ社會的責任を有する、それは次の如くである。

第一に社會事象に對する有るがまゝの認識の立場をとらねばならぬことに於ては、社會科學の立場と一致するものだ。然らば吾々の生きて行く道——此の點に於ては兩者は完全に別れてしまふ。

マルキストは、人間に此の社會を動かす直接の力が與へられて居ると見て、それを階級闘爭に依る社會革命を以て、矛盾を揚棄しやうとするのだ。揚棄された社會は無限への發展だと云ふ。

この場合に宗教は、如何なる立場をとるであらうか、社會をあるがまゝに認識して、理想社會への發展――無限の發展に於て、人間にそれを完全に爲し遂げ得る力がないと見るのだ。從つて先づ人間力を一應全々捨てるのだ。かゝる段階があることが、同じく社會理想を有しつゝも、社會科學者と異なる所だ。

此の世に於て限られたる人間の力、それを完璧のものと思ひこむ程、無理があるものはない。吾々の力に依つて、社會の一切を律して行かうと考へるから、それが達成されぬ時に、自已分裂に陷るのだ。吾々の愛は、眞實に愛するものすら裏切る樣な、始終なき愛ではないか――。

宗教は人間を完全なものと見ない。また無限の力のあるものとも見ない。そこで先づ自我を捨てゝ、如來の世界に沒入せしめる、これを救ひと云ふのだ。然るにマルキストは、かく宗教を信ずることに依り、ビールの氣の抜けた樣に、無氣力になるのだと云ふのだ。

吾々は大きな世界に這入つた時、吾々ならぬ力に依り、初めて理想世界に生きる力が與へられるのだ。これを即得往生と云ふのだ。かくしてこそ神通力が得らるゝのだ。即ち神通方便を以て、有

緣を救ふことが出來る世界だ、神通無碍の世界だ。從つてそれは無限への發展である。

宗教は一人信じて救はれる世界に終始するものではない。從來の宗教は其の形式のみ殘つて、しかも民衆から隔離したお祭騒ぎの樣なものもある。今や宗教は其の本源の姿に歸らねばならぬのだ。表現の形式など、社會とともに進化しなければならぬもので、日本の佛教も、單なる寺院の宗教であつては、民衆を救ふことは出來ない。宗教に對する各派の爭ひが打破されて、佛教が大衆の中に、其の實踐的なものとして出現せぬ以上、それは民衆のものとならぬのだ。

小野は今、既成政黨の何れにも屬しない、國家ファシズムの新黨、及び社會民主主義をとる合一無產政黨、其の何れも既成の政黨として見るのだ。何處にも行かぬと云つても、決して社會的運動を休止したものではない。

日本資本主義の行詰りから、現在の勞農大衆及び、小市民階級の窮乏化、それ等が如何にして救はるゝであらうか、先づ產業的には大資本の獨占の排除――物質に救はれる將來の社會は、農民勞働者を中心とした共同社會であらねばならぬ、それが日本の國民性に融合したものとして、漸次發展をするであらう。

また日本の社會狀態の現在の行詰りを打開する契機となるものは、滿洲新國家の成立である。此

れに對し小野は、左翼の帝國主義戰爭反對とは、全然別個の立場に立つものだ。

しかしあまりに强力なるフアツショ的反動は、却つて極左と同樣日本の危機を招來するであらう。德川家康も「勝つことばかり知つて、負けることを知らざれば、害その身に及ぶ」と云つた、味ふべき言葉だ。

共產黨の無產階級革命化に對し、フアツシズムは、資本主義の硬度化だ。この時に强大なる權力の支配を要することは當然だが、かゝる壓制は永續するものではない。

眞の日本の行くべき道は、滿洲より、日本本土に至る大國家の擁護、それに基く國家經濟の立直しでなければならぬ。國內に於ける、勞働者、農民、小市民の健全なる運動は將來社會の支柱となるであらう。そして眞の傳統的日本精神の發顯者となることが、正しい國民の責務だ。

小野は前途多き日本の前に、信仰を把握せる大衆の一人として、今後の國民的責務を果したい。そして新日本の建設のために進むことを誓ふのであつた。日本とともに、日本の大衆とともに進むとき、それが即ち自己の生命の擴充であつた。

——完——

昭和七年十一月十七日印刷
昭和七年十一月十九日發行

共產黨を脫する迄　定價八十錢

著作者　小野陽一　東京市神田區三崎町二ノ一一
發行者　早乙女勇五郎　東京市神田區三崎町二ノ一一
印刷者　西村良藏　東京市下谷區二長町一八一
印刷所　西村印刷所

發行所　東京市神田區三崎町二ノ一一　振替口座東京一三〇七七番　大道社　電話九段三一〇一番

634
45